

あそ 3
2019



ツタバウンラン

鎌倉や小路また小路の沈丁花

落椿栗鼠と鶴来て争す

吾が墓のデザインをする日永かな

春雷のとどろく谷戸の栗鼠さわぐ

春寒や時には野良猫に語るなり

病院の窓の夕陽に吾が顔や



絵と俳句・関合正昭

あさ

三月



須賀忠男

春の山

おしろいや足を助ける雨かひな
ひからない星もあまたに初まぬり
雪になるまへの小雨のななめぶり
みればみたでみねばみないで湯豆腐に
晩年といふをさづかり思ひ羽根
はなうたの軍歌に氣づき春の山
はなうたに上手下手なし笹子鳴く

東京

佐藤 喜孝



埼玉

秋川 泉

寒に入る

灯明のゆらぎを越えて初明り
吾子誕生その日を待ちて寒に入る
走り来てくれとせがむ子餅の花
人の喪を小正月には忘れをり
大寒や鶴折る指が痛みをり

東京

石森 理和

雑詠

正月の微細な埃射光かな
息をつく小さき手の跡四日かな
終点から又電車バス初の旅
八時間掛けて初旅ラムネの湯
菜の花や波音響く青き海

埼玉

大日向幸江

福の神

神 柵 の 榊 に 宿 る 福 の 神
落椿お手玉のごと空に投げ
女 優 死 す 昔 話 の 寒 雀
きんとんの照りはなやかにお正月
去年今年川の流れの絶えまなく

東京

七郎衛門吉保

光・ひかり

喰積の仕舞にひかるゼリー羹
年玉に瞳ひかるや前奏曲^{プレリュード}
年賀への信号冴えてひかりをり
光の字書初展の勢揃
寒月の白き光の突き刺さる



東京 篠田 純子

女正月

あめつちの間の光年歩む
あはひ
×張のあとは羊羹女正月
摩耶夫人もマリアも貞女鏡餅
藤穂女史の茹で蒹葭草甘し旨し
信号待ちに抱き締めらるるクリスマス

石川 定梶じょう

日脚伸び

聖誕祭マグにドナルド・ダックの絵
貧しいは貧しいけれど初日の出
輪飾がドアにちんまり茶房口口
積み残しありけり砂礫雪こんこ
投函後何の安堵の日脚伸び

東京 須賀 敏子

初鏡

寒梅の一輪光をあつめけり
切干や風と光を味方とし
束の間の光の中にみそさざい
マクローンのフランス遠し室の花
パリのメモ
初鏡どこから見てもグレイヘア

東京 田中 藤穂

初霞

初霞晴れ松原に光射す
二天門今日満開の冬桜
初参り和服の若きカップルら
石疊柵の咲く傳茶房
寒満月椎の葉蔭に光をり



三重

長崎 桂子

寒あやめ

果物も今朝温める予防かな
冬の柿一口に切る午後三時
温暖化歩道啄む鳩に寒風
紫苑色香りを誇り寒あやめ
寒あやめ手入れの後を輝かす

東京

森 なほ子

初芝居

彩色の淡きが床し宝船
泥葱の剥けば光れる寒さかな
元日もはや夕月の光り初め
幼子の声張り上ぐる初芝居
初芝居獅童忠信狐ぶり

東京

赤座 典子

お正月

外つ国のテニス応援初テレビ
つつがなく雑煮いつもの鍋使ふ
初釜や見慣れぬ五徳覗き込む
ほろよひの伯父さん初めて読むかるた
七日粥土鍋ふつつ深緑

東京

佐藤 恭子

二日はや

二日はや日をうけとめし蒼かな
枝垂梅なかで遊んで日暮れきて
ほのかなるいろにまみえし朝桜
風光るおいしさうなる草ばかり
掌を器のやうに夕日かな



三日はやタヲルのほつれのごときかな

佐藤喜孝

冬櫛落暉を徐々に吸込めり

赤座典子

降りしきる木の葉に猫の顔をあげ

秋川 泉

獣肉をジビエと食べる降誕祭

大日向幸江

福島の再生ドラマ 木守柿

七郎衛門吉保

内匠頭も吉良も名君冬もみぢ

篠田純子

網結けば電気の球の納屋に雪

定梶じょう

祖母の被布宝の様に仕舞けり

須賀敏子

人のみな足早本郷冬ごるる

田中藤穂

極月や左手使ふ不自由さ

長崎桂子

寒林へ礫どこかでこつと音

森なほ子

喜孝抄



一字空けの俳句の穴へ忘れ花

佐藤 喜孝

愛用している産調出版発行「読本・俳句歳時記」（以後「愛用本」と記す）に忘れ花が無く、同意の帰り花を見ると、早や台風で樹木に影響があった年に多いといわれている、とある。作句されたであろう昨年は正にこんな年であった。作者はこの句の穴にどんな花が似合うと見たのだろうか。或いはどんな花が咲いているのだろうか。（吉保）

小春日や横丁のご隠居今何処

森 なほ子

我が家の近所のご隠居さんは、毎日、家の前を丁寧に掃いておられました。偶にお孫さんが訪ねて来た時は、にこにここと三輪車のお相手をされていました。お見かけしなくなってから随分日が経ちました。ふと色々なことが思い出されるのが、小春日なのですね。（典子）

着ぶくれて昔々の石の街

赤座 典子

読後なぜか松本の零士の『銀河鉄道999』のアニメで主人公の星野鉄郎が見知らぬ星の見知らぬ街を彷徨ってゐる映像が浮かんできた。着ぶくれてに他所者としての旅人の雰囲気滲み出てゐる。「昔々」も昔噺がはじまるやうで読者を自然に句に誘ってしまふ。魅力ある句。（喜孝）

誘はれて酒一升と芋煮会

秋川 泉

里芋の出回る頃に芋煮会風のものを作ってみたりするが、自宅の食卓ではおかずの域を出られない。やはり河原で焚火で風に吹かれて、そして地元の酒も添えてでないと、美味しい芋煮にはならないのだろう。愛用本掲載句に「女にも酒豪が居りて芋煮会」（福島祐峰）があった。もしかすると作者もこの口なのだろうか。（吉保）

平野枯る撓な柿はオペラ歌手

石森 理和

以前より、作者の対象からの発想の飛躍力に驚きを感じていたが、今作は柿からオペラ歌手へ大きな飛躍だった。オペラ歌手、とりわけ女性歌手は総じてふくよかな体躯と丸っぽい顔の組み合わせ、と撓な柿とでイメージが重なった。飛躍の対象に音楽関連の言葉を取り込むことに、私も時々チャレンジしている。（吉保）

酉の市バッグに入れる火消し札

大日向幸江

火消し札、調べました。火事が多い江戸時代の消火の際、火消し組が、組名を記した札がルートとか。小さな札となり縁起物とされました。火難災厄を防ぐお守りとして、酉の市に持って行かれ

たのですね。

最近私も「福徳五宝の寶守」というのを頂き大切に持ち歩いております。(典子)

手足欠くポンペイの像天高し 七郎衛門吉保

押さえた表現が骨太の作品に仕上げた。ポンペイの悲劇的な像をネットで数多見るとは出来る。その地に立った作者は手足欠くと押さえて述べ、其処で、その時体で感じた季語を置かれた。計算された季語と違ひ力強い重みのある季語になった。季語の働きは不思議だ。(喜孝)

枯れ葦にしばし雀の居り無風 篠田 純子

枯れた葦原には、葦の種とか葦を棲家とする虫とか、雀の餌になるものがあるのだろうか。それとも単にジャングルジムみたいな遊び場なのだろうか。暫くすると愛用本掲載句「枯芦やぼつぼつと雀飛び出たり」(北原白秋)へとなるのだろうか。作者と白秋が時を経だてて同じような景をみているとは。(吉保)

半鐘は今も高きに山眠る 定樞 じょう

都会では、半鐘を見る機会ほとんどなくなってしまうが、地方に向くとそれを目にするこ

とが出来るとは思われる。いざ鎌倉の時はそれを打ち鳴らすのだから。無線や放送に主役の座を譲つてはいるが、無彩色の景觀とその存在は変わらないのである。(吉保)

ご自由に冬瓜一つ持ち帰る 須賀 敏子

一度にたくさん獲れる野菜等を、どうぞと言って頂けるのは、とてもラッキーです。私もゴーヤと隼人瓜を頂いたことがあります、とても新鮮でした。冬瓜にもめぐり会いたいものです。(典子)

山茶花を椿かと問ふう牛乳屋 田中 藤穂

藤穂さんからは、色々な方と話された様子をよく伺います。郵便配達の人にお庭の花や木を褒められたり、少し危なそうな人との垣根ごしのやりとり等。どんな時にも上手に会話をされて流石と、いつも感心しております。(典子)

みどり濃くぼっとしてゐる冬木立 長崎 桂子

愛用本に冬木・冬木立は、常緑樹にもそれなりの趣があるが、普通は落葉樹をイメージするとある。蕪村や虚子を含めて五十八句が掲載されているが、その全てが落葉樹であった。ここへ「みどり濃くぼっとしている」と形容されて切り込んだ作者に敬意を表したい。(吉保)

この石楠花の蒼は、ガラスペンの先のような細さだったのでしようか。冬の風に耐えて、やがてどンドン膨らんで行くことでしょう。久しぶりに泰江さんの句、懐かしかったです。他の人の真似の出来ない素直な句を、これからも沢山送って下さい。待っています。(典子)

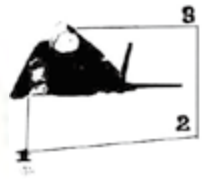


窓 ——— 長崎桂子

東南の窓からの景色です。南北に走る道路は伊勢湾岸道路。国道一号線のバイパスで交通量は多く埃と事故等での騒音は凄まじく恐怖を感じます。二十年前、車一台通れる道に此の話が急に持ち上がり話し合いするの署名の効果なく、所有地の三分の一を提供する事となり、自宅の一部と事務所も壊し、大切にしてきた庭の樹木が切られ、庭石が運び去られるの見送りました。



定梶じよう



片言の子の初夢を覗きたし

森 なほ子

正直に思いを述べて良しとすべきかもしれませんが、まっ正直に過ぎます。めり張りが無いのです。あたら勿体ない。結局休止する処が欲しい。〈獲枕子の夢のなか覗きたし〉。

新年詠ずらり写真は皆若し

切字を遣うか、この句のように取り合わせることで句中に休止が入ります。休止が入るとは散文から離れる、ということ。

大根の葉の炒め煮のレシピでふ

この句には切字がありませんし取り合わせ句でもない。なのに佳句である、と感ずるのは「意外さ」があるからなんです。大根の葉っぱの炒め煮、しかも、そのものではなくレシピであるという。意外外。

田中 藤穂

亡き母が部屋のどこかに曇るる夜

中七「部屋のどこかに」が平凡過ぎないでしょうか。亡き母が部屋にゐるやう曇るる夜。

人見舞ひ出る病院の冬の草

「人見舞ひ出る」が窮屈な言いよう。動物病院でなかったら「人」も不要ですね。〈見舞ひたる病院出でて冬の草〉。事実なんでしょうけど「冬の草」が利いていきます。

ヒートテックス肌になじまぬ晴続き

以前に私、繊維関係の業務についていたことがありまして、東レが、体温を糸の中に閉じ込める技術を開発した、ということ噂程度に聞いていたのです。しかし「ヒートテック」に関して全く知識がなく、繊維製品卸を生業にする友人に尋ねて初めて承知したのでした。

でも藤穂さんのお句。晴天が続きあたたかいので肌着がからだになじまない、の意味ですから理由を説明していることになります。詩句に一番の敵は「説明」です。

赤座 典子

物言ひの約め過ぎなり去年今年

「物言ひ」は言葉遣いのこと、相撲でいう「物言い」ではない。ですから句歌でいう「省略し過ぎ」ということでしょうか。年の移り変りの速さに自分の（あるいは誰でも宜しいのでしようが）もの言いの「約め過ぎ」に改めてこ

ころ付く。このくらい離れた取り合わせだからこそ佳句になった。

ゼッケンのわらわら下る深雪晴

スタートしてそう時間がたっていない。「ゼッケンのわらわら」が上手な形容。まいて下り坂とあればなおさら。

寒満月鵝色の失せ澄み切れり

満月は確かに上り始めは赤みを帯びてますね。その月が高くなるにつれその色を変えていく。よく見ているわけです。

大日向幸江

同じ夢語りし友や初電話

「同じ夢」がよくある言辭、「同じ」はなくもがな。へ初電話夢を語りし友垣より。

輝かし家族写真の年賀状

現代の葉書は安直にカラー印刷ができますから、仰有る通り。あの類の写真はまさに「輝かし」です。

杯に花びら浮ぶ女正月

一説に、女性にとり家事で忙しい所謂「男正月」が過ぎて女だけの新年を祝った、という。何の花びらだったのでしょうか。桜？それを言わないのも修辭のひとつ。

七郎衛門吉保

誰も彼もダウンで混み合ふ初電車

「誰も彼も」、「ダウンで」に説明臭があります。へダウン着て混み合ひにけり初電車。

野仏にダウン着せたし霏霏の雪

坐五「霏霏の雪」。「霏霏」はタリ活用の形容動詞ですから「霏霏の」とは遣えない。〈野仏にダウン着せたし霏霏と雪〉。

寒紅に負けぬ赤色ダウンかな

俳句のことば遣いとして「寒紅」と「赤色」を並べて使用するのはやっぱりまずい。〈寒紅に負けない色のダウンかな〉。吉保さん、口語を嫌うかもしれませんが。

石森 理和

寒の餅黍と決めをり嬉しい黄

「嬉しい黄」が上手。愚母も寒には必ず黍餅を作ったものでした。

掲き立ての餅は赤子を抱くやうに

助詞の「に」「を」「も」などは、もし省略し得るなら省略した方が宜しいのです。〈掲き立ての餅は赤子を抱くやう〉。因みに理和さん、餅を赤子に見立てましたが、赤子を餅に見立てても面白い。季感は弱くなりますが。〈掲き立ての餅を抱くやう赤子かな〉。

蝉梅の秘めたる想ひ香に伝ふ

香りは花の秘めたる想いだという。なる程だからあんなに匂うわけですね。

秋川 泉

ぼっかりと寒満月の今生まる

「ぼっかりと」が凡のようで平凡ではない言いよう。ただ、「寒満月の」とするよりも「寒の満月」と措いた方が落ち着くかと思いますが。〈ぼっかりと寒の満月今生まる〉

ぬっと出し寒満月に声を上げ

月の出に作者が声を上げるのは凡。月が声を上げた方が。へ声上げて寒の満月ぬっと出づく。

転びけり寒満月を称へみて

「転ぶ」がやや大仰。へつまづけり寒の満月称へみて。

長崎 桂子

はや三日月鈴鹿風に向かふ帰路

桂子さん、四日市のお住まい。だからこそ「帰路」の語が活きてゐるのです。

退職し生き甲斐の話事始

「生き甲斐の話」とありますので定年退職なんでしょうね。かつて私の友人、当時四〇歳になってたでしようか。勤務先を変えたために「退職」のことばを遣った句を投稿。とり上げてくれたのはいいが縷々、老年だの老い先だのこ

とばを使って鑑賞されてみて、困惑した、ということがありました。桂子さんの句は「事始」ですから中七の措辞によく響きあっています。定年後でも「事始」のように何かにとりかかって生きがいとする。

燦燦と五体を包む福茶かな

福茶を私味わったことありませんので、お句が誇張なのか否か分らない。ですけれど、もし誇張ならこのくらい誇張して初めて俳句になるのです。私の好みですけれど、へ燦燦と五体を包み福茶かな、へ燦燦と五体包めり大福茶のようには休しが欲しいのです。

篠田 純子

地下駐車場は薄き瓦斯室人日なる

地下駐車場にナチスの瓦斯室をイメージしているのでしょうか。「薄き」はその瓦斯の濃度が薄い？あるいは明度のこと？いま一つわかりません。

監視カメラの死角地を歩く鴨

「死角地」とは言わない筈ですので、「死角」で切れて「地を歩く鴨」と続くのでしょうか。面白い取り合わせ。破調の句は、その方が面白くなるから破調にするわけで、純子さんの好みでは十語七語の句になる。でも例えば、へ歩く鴨監視カメラの死角かなへに直したら純子さんにはまどやかな直しようではなくなるのです。

体育坐りのだいだらぼっち山眠る

おもしろい。体育坐りをした「だいだらぼっち」の痕跡は湖か潟か。遙かかあなたには関東の山々が。

須賀 敏子

伴走者紐新しや走り初め

もしかしたらパラリンピックを目指して。

寒晴や見事に続く飛行機雲

「見事に」の措辞がみごと。寒晴の飛行機雲は夏季よりかかる時間が短いはずですけど、だからこそ貴重。

佐藤 喜孝

チンをして雑煎をたべて晝寝して

ひとり暮しのお正月。

電報は戸をたたくもの夜の雪

私の住まう処は、外国航路の船員が圧倒的に多い地方でした。彼らは例えば、一年、二年乗船して三か月あるいは半年休暇をとる、そんなサイクルで勤務するわけですけど、いよいよ公暇が終了して船会社からの乗船命令が来るのは、電話が普及するまでは全て電報でした。「とうとう電報が来た」というのが当時の挨拶。電報がもつとも早くて確実な唯一の連絡法だったので。

日は渡るさきざきにある冬の花

「冬の花」。固有の植物はないようですので、茶の花、あるいは山茶花、佐助、
蠟梅もその中に入るでしょうか。いずれにしても牡丹のような原色調のものは
少ない。それが太陽の移動の先々に「咲く」のではなく「ある」のです。「花」
と「咲く」の撞着を嫌ってのこの語の使用ではないでしょう。冬の花らしい形
容。読みつぐにつれ味わいの深まる句です。

窓
——
須賀敏子

娘がさいたま市北区に家を決めた。敷地の東隣は広い
駐車場があり、その先は中山道。そして新幹線の高架が。
この家の東窓からは常に新幹線の上り下りが止むこと
なく通過するのが見える。そして時々ニューシャトル。「鉄
道博物館」の駅も近い。
猫の「きなこ」はつれないが、この家が好きだ。東窓
から見える夜の新幹線の窓明かりは旅心をそそられる。



定梶しよう

の三書のうち広辞苑が、初めて、二十四万語の収録
に到達した。そんな新版が刊行されたことが話題に
なった折りの句。
これも感でしょう。
何によらずそうなのですが、文芸でもこの感の良
しあしに左右されることみんな知っていて扱って、実
践すること難しい。だから面白い、とも言えますが。

風鈴を吊り替ふ東京物語 中川句寿夫

句寿夫さんは、ともかく俳句感のいい人でした。
この句は『雲母』参加当時の作品だが、「東京物語」
が実は何であるかを知らないで取り入れて、そして
成功した作品。言葉への感覚がよくなかったらこん
なことはできない。即ち俳句感。

かりがねやずしりと二十四万語

鶯が鳴く縹渺として数へ年
朴の芽がほぐるる童話読むやうに
ただよへるもの白壁の今年竹
父看取る更に遠くの夕蛙
竹林に入りて万の目しじみ蝶
秋燕動かぬ山を縦横に
新涼の群を離れて真鯉かな
雪解川自足の母に音立てて
あたたかき十一月の爪を切る

辞書出版の世界で鎬を削る「辞苑」「辞泉」「辞林」

運ぶ

西の市運び込まれし長梯子
大鍋を河原に運ぶ薄紅葉
山蟻や餌にあらざるもの運ぶ
死にはじめて無までの時間蟻運ぶ
ビーバーの大枝運ぶ水澄めり
囲炉裏あり主蕎麦打つ膳運ぶ
雪被く鳥が運びし実南天
立春のかけ海の香を運びくる
何処よりも春風香り運びくる
春の風潮の匂ひを運び来る
身ほとりに明るさ運ぶ福壽草
心臓運ぶ緑の箱に五月の陽
紫の風運びけり濃紫陽花
病室の義母に運びし梅の花
幼児の一途に走り稲運ぶ
梅雨晴間まずりハビリの歩を運ぶ
立てて運ぶ假設のトイレ花の雲
アスパラを立てたせて運ぶクール便
幸せを運ぶ燕の旅立ちぬ
花椀ギヤルソン運ぶ大き盆

佐藤 喜孝
鈴木多枝子
渡邊 友七
篠田 純子
赤座 典子
石森 理和
早崎 泰江
鎌倉喜久恵
早崎 泰江
鈴木多枝子
芝 尚子
佐藤 喜孝
森山のりこ
長崎 裕子
森山のりこ
須賀 敏子
大日向幸江
赤座 典子

「羽衣」を覗んとて出づる寒の雨
纏ひたし羽衣に似る春の雲
鶴岡で羽衣の能あはあはと
有刺鉄線ぬけて満開羽衣草
羽衣のやうな五歳の更衣
此処彼処羽衣掛かる山法師

バザー

銀杏落葉バザー賑はふニコライ堂
はざま

鳥賊火燃ゆ空と海とのほざまにて
霜晴や屋根のはざまに小さき富士
人工呼吸ビルのほざまに夏の雲
規則正しく蝉鳴いてをりビルはざま
行つてきますの顔はさまさま牽牛花
電やビルのほざまに突きささるる

鋏

油絵に鋏さしいれ春隣
ばら剪りし鋏で開く子の便り
花鋏使はざる日の石路の花
けふ我鬼忌つかひて鋏切れぬかな
灯袋に花鋏置き日の短か
長枝鋏たてかけておく十一月
春の宵和鋏に鈴つけてみる

鎌倉喜久恵
松本 米子
芝 尚子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
七郎衛門吉保
黒澤 佳子
関口 ゆき
早崎 泰江
堀内 一郎
鈴木多枝子
齊藤 裕子
篠田 純子
佐藤 恭子
赤座 典子
森山のりこ
定梶 しよう
田中 藤穂
竹内 弘子
鈴木多枝子

羽衣

ひと夜さの雨のぼたんに鋏入れ
夏草にためらふことのなき鋏
よく切れる鋏の欲しきそぞろ寒
訃報受く郁子と木鋏左手に
シヤキシヤキと春の水切る花鋏
三伏のぶりき鋏の大きな柄
冬晴の鋏の刃先開幕式

挟む

シンバルで空気を挟む事始め
春愁や乳房を挟むマンモグラフィ
初景色携帯電話胸に挟み
書に挟む写真一枚十二月
昇降機落葉を挟み下り来たり
炎惑を指で挟まむ濁酒
洗濯挟み付け直す指青嵐
婆娑羅
男仰臥をんなうつ伏せ春婆娑羅

嘴

御慶のぶ鴉は黒き嘴をもて
鴨の嘴かたむけて散る椿
嘴でもぐ落ちる枇杷あり鴉の目
朝焼や鴉そろひて嘴を研ぐ
日の中を反嘴鴨はとほりぬく

芝 尚子
佐藤 恭子
竹内 弘子
石森 理和
佐藤 喜孝
定梶 しよう
赤座 典子
佐藤 喜孝
篠田 純子
堀内 一郎
芝 尚子
篠田 純子
佐藤 恭子
黒澤 佳子
堀内 一郎
後藤 志つ
早崎 泰江
石森 理和
後藤 志つ
佐藤 恭子

旺盛にみかんをゆらす鴨の嘴
枯木から嘴から離る昼の月
かはせみの嘴に小魚の真一文字
寝返りの嘴差し替へて浮寝鴨
嘴と嘴ざわめき起る夏木立
一声の鋭し鶴の紅き嘴
鴨の嘴みかんの汁の光りをり
噴水や嘴太鴉隣に来
柚啄み椿の枝に嘴浄む
冬ざるる折鶴の嘴折りてより
頂きし数多の林檎嘴の跡
鶴の嘴と出くはしてゐる鯉の群
付け足さる林檎嘴跡二つかな

箸

千代紙の鶴の箸置年用意
箸がささるまで鼻唄の蕪蒸
秋の昼布巾の下の箸茶碗
炭をつぐ火箸は環に繋がるる
今朝ことに水温みをり箸洗ふ
煮凝のどこから箸をつけやうか
箸洗ふ音の清しさお元日
新蕎麦に一箸一点山葵添え
青鰻に京の菜箸おろしけり

早崎 泰江
佐藤 恭子
竹内 弘子
篠田 純子
石森 理和
赤座 典子
早崎 泰江
石森 理和
石森 理和
定梶 しよう
赤座 典子
篠田 純子
赤座 典子
芝 尚子
佐藤 恭子
佐藤 喜孝
河合 笑子
栢森 定男
関口 ゆき
石森 理和
芝 尚子

あとがき

はしたて集のこと

「あを」は会員誌。をりをりに先達を立て俳句の研鑽にいそしんできた。この欄を定規しようさんの力を借りしはらく私と二人で受け持つことにさせていただく。隔月といふすこし気ぜはしいが会員の皆様よろしくお願ひします。

御厚志多謝

田中 藤穂様
大山 夏子様
石森 理和様

短文のお願い

投句欄に併設して短文用の原稿罫を付けましたが、枳が小さいのと短文過ぎるので廃止、以後用紙は自由とさせていただきます。

「前月抄」のカットに授業で作ったといふ俳句を載せました。きつとご子息やお孫さんの作られた俳句のお有りになるのではと思ひます。そのことが今回のテーマです。「ドア開けるあたりいちめんぎん世界」の季語は何かとふとおもひました。銀世界が公認?の季語なのか調べてみました。「季寄せ」(山本健吉)・「読本俳句歳時記」(産調出版)・「十七季」(三省堂) 全て採りあげられて居ませんでした。ほかの歳時記も同じようなことと調べるのを止めました。

Y A H O O 知恵袋に以下の質問と答をみつけました。

銀世界って言葉は冬の季語ですか？

「編集」質問者様にはたいへん優れた感性が見受けられます。「銀世界」：このような美しい言葉を思いつく人間が今まで居なかっただけの事であり、だからこそ、本には載ってはいないのです。『雪』『冬』等の手垢にまみれていないすばらしい発想です。こんな手垢にまみれた言葉と「銀世界」の持つ美しい響き、さて、どちらが人の心を打つでしょうか?そもそも「季語」とは、季節を感じさせる事が出来れば、それで十分なのです。このように優れた感性を、定められた『枠』に捕われて諦めるにはあまりにも惜しい、惜し過ぎると思ひます。(以下略)

子供の世界は毎日が発見ですね。(喜孝)

二〇一九年三月号

発行日 三月二十五日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)